

学校教育目標

**子どもたちに意欲・熱中・満足を実現します**

研究主題

**ともにかかわり合いながら、自分づくりを進める子どもの育成**

1 横浜市立立野小学校教育課程編成の方向性

平成30年度より、立野小学校では、学習指導要領改訂に伴い教育課程を編成するための授業研究を行っている。教育課程を編成するにあたって、まず、学習指導要領総則を分析することで教育課程編成の方向性を定めていった。

(1) 学習指導要領総則の分析

学校教育が組織的、継続的に実施されるためには、学校教育の目的や目標を設定し、その達成を図るための教育課程が編成されなければならない。(総則 p 14)

学校教育目標 「子どもたちに意欲・熱中・満足を実現します」

各学校の教育課程は、これらの学校の運営組織を生かし、各教職員がそれぞれの分担に応じて十分研究を重ねるとともに教育課程全体のバランスに配慮しながら、創意工夫を加えて編成することが大切である。また、校長は、学校全体の責任者として指導性を発揮し、家庭や地域社会との連携を図りつつ、学校として統一のある、しかも一貫性をもった教育課程の編成を行うように努める必要がある。(総則 p 18)

教育課程を編成するための方向性を明確にする必要がある。

授業研究をする必要がある。

児童や学校及び地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと(以下「カリキュラム・マネジメント」という。)に努めるものとする。(総則 p 40)

子どもたちの現状を分析する必要がある。

作って終わりではなく、活用して評価し、これまでに作成したものを改善していく必要がある。→授業研究の必要性

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進める際の指導上の配慮事項

ア 児童生徒に求められる資質・能力を育成することを目指した授業改善の取組は、既に小・中学校を中心に多くの実践が積み重ねられており、特に義務教育段階はこれまで地道に取り組み蓄積されてきた実践を否定し、全く異なる指導方法を導入しなければならないと捉える必要はないこと。

立野小学校のこれまでの研究成果を活用していく。

イ 授業の方法や技術の改善のみを意図するものではなく、児童生徒に目指す資質・能力を育むために「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の視点で、授業改善を進めるものであること。

ウ 各教科等において通常行われている学習活動（言語活動、観察・実験、問題解決的な学習など）の質を向上させることを主眼とするものであること。

エ 1回1回の授業で全ての学びが実現されるものではなく、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、学習を見直し振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、児童生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるかを考え、実現を図っていくものであること。

オ 深い学びの鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要になること。各教科等の「見方・考え方」は、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方である。各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の学習と社会をつなぐものであることから、児童生徒が学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすることにこそ、教師の専門性が発揮されることが求められること。

「見方・考え方」を働かせることができるように授業改善していく。

カ 基礎的・基本的な知識及び技能の習得に課題がある場合には、その確実な習得を図ることを重視すること。（総則 p 4）

今回の改訂は、「生きる力」の育成という教育の目標が各学校の特色を生かした教育課程の編成により具体化され、教育課程に基づく個々の教育活動が、児童一人一人に、社会の変化に受け身で対応するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、自らの可能性を發揮し多様な他者と協働しながら、よりよい社会と幸福な人生を切り拓き、未来の創り手となるために必要な力を育むことに効果的につながっていくようにすることを目指している。（総則 p 3 5）

今回の改訂も「生きる力」の育成を目指していることは変わらない。

「知識・技能」

教科の特質に応じた学習過程を通して、知識が個別の感じ方や考え方等に応じ、生きて働く概念として習得されることや、新たな学習過程を経験することを通して更新されていくことが重要となる。

（総則 p 3 7）

「高い質の知識・技能」が必要。「知っている」ことを「関連付ける」ことが大切。

「思考力・判断力・表現力」

- ・ 物事の中から問題を見だし、その問題を定義し解決の方向性を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、振り返って次の問題発見・解決につなげていく過程
- ・ 精査した情報を基に自分の考えを形成し、文章や発話によって表現したり、目的や場面、状況等に応じて互いの考えを適切に伝え合い、多様な考えを理解したり、集団としての考えを形成したりしていく過程
- ・ 思いや考えを基に構想し、意味や価値を創造していく過程（総則 p 3 8）

このような学習過程を経る時には、「比較」「分類」「整理」「関係付け」「推論」といった思考をしながら判断し、表現する活動を行っている。そのような学習活動にしていかなければいけない。

「学びに向かう力・人間性等」

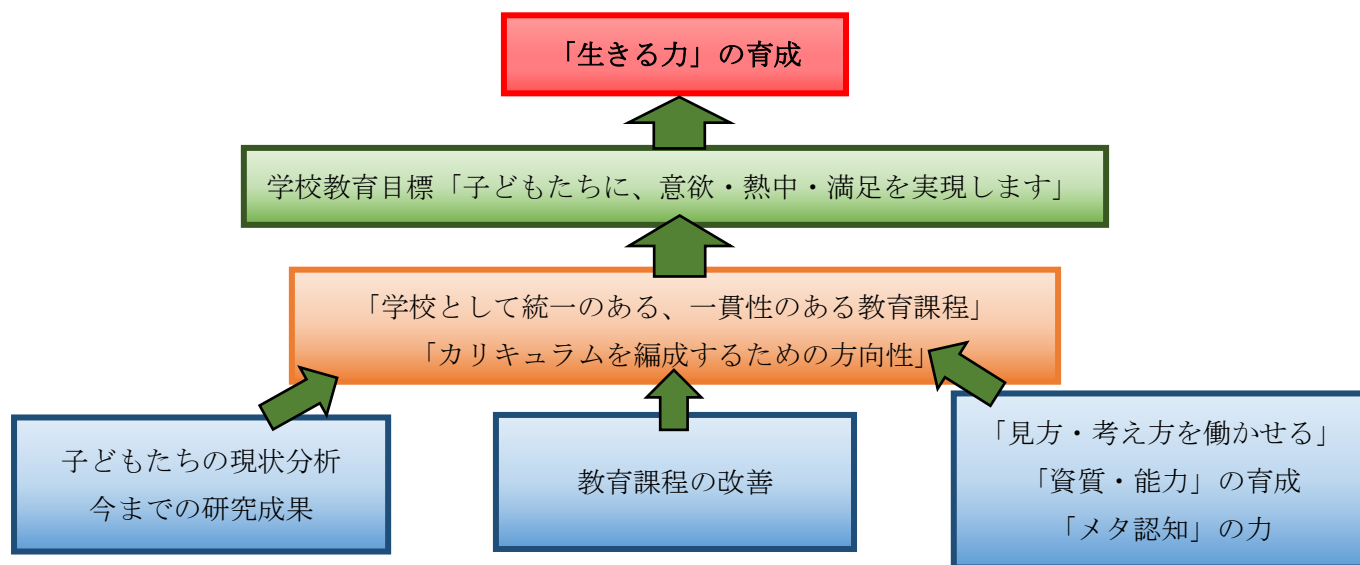
児童一人一人がよりよい社会や幸福な人生を切り拓いていくためには、主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する力、よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度等が必要となる。これらは、自分の思考や行動を客観的に把握し認識する、いわゆる「メタ認知」に関わる力を含

むものである。こうした力は、社会や生活の中で児童が様々な困難に直面する可能性を低くしたり、直面した困難への対処方法を見いだしたりできるようにすることにつながる重要な力である。また、多様性を尊重する態度や互いのよさを生かして協働する力、持続可能な社会づくりに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやりなどの人間性等に関するものも幅広く含まれる。(総則 p 3 9)

「メタ認知的活動」を取り入れる必要がある。→学習の方法や内容の「振り返り」

## (2) 教育課程編成の方向性

教育課程を編成することで、学校教育目標「子どもたちに意欲・熱中・満足を実現します」を達成できるようにしていきたい。学習指導要領総則編によると、「学校として統一のある、一貫性のある教育課程」にするためには、「カリキュラムを編成するための方向性を明確にする必要」がある。そのためには「子どもたちの現状を分析する必要」がある。子どもたちの現状を分析し、課題を明確にしたうえで、どのような教育課程を編成していくのか考えるとき、「今までの研究成果を活用する」ことができる。しかし、今までと同じではなく、「見方・考え方を働かせる」ことができるような授業、「資質・能力」を育成するための教育課程にしなければならない。そうすることで学校教育目標を達成し、「生きる力」の育成を目指す。そこで、「メタ認知的活動」が重要になってくると考えた。見方・考え方を働かせたり、自分の学習状況をメタ認知したりすることを通して、「資質・能力を身に付けた姿」が見られるような授業にしていく。「教育課程は編成して終わりではなく、活用して評価し、改善していく必要がある」ので、「授業研究」が欠かせないと考えられる。



過去数年間の研究においては、「学習に意欲的に取り組む姿」、「自分の考えを積極的に発表する姿」、「社会事象や自然事象に主体的に働きかけ、問題意識をもって追求し、それをもとに考えたことを自分自身の言葉で語る姿」、「自分の伝えたいことを相手に分かってもらうために何とか伝えようとする姿」、「相手の伝えたいことを本気で分かろうとする姿」、「友達と交流することのよさを感じる姿」、「身に付けた力を同じ教科の他の単元や他教科に生かす姿」が見られ、成果が出ている。

一方で、「意欲が継続しない」「言われないとやらない」「進んで動くことが少ない」「低いレベルでの満足で終わることがある」という課題が残った。

そこで、「表面的ではなく、より深く、心から「意欲・熱中・満足」する子ども」を育てていく必要がある。これは、学習指導要領が目指している「生きる力」そのものである。「生きる力」を英訳すると、「zest for living」である。「zest」とは、「心から湧き上がってくる強い興味、熱意」という意味である。本校の学校教育目標を実現することは、「生きる力」を育成することにつながる。それは教育課程編成の目的と合致する。つまり、今までの研究の方向性は、新しい教育課程編成の方向性と一致している。

### (3) 研究主題の設定

学習指導要領を分析し、立野小学校の子どもの実態と教師の願いを重ねると、「もっといろいろなかかわり合いが必要」「変化の激しい時代を生き抜くためには自ら進んで活動できるようになることが必要」ということが見えてきた。そこで、研究主題を「ともにかかわり合いながら、自分づくりを進める子どもの育成」と設定した。この研究主題を具現化することが「意欲・熱中・満足する子ども」の姿になり、それは、「生きる力」を育成することになる。

## 2 研究主題の分析

### (1) 「ともにかかわり合いながら」について

「ともにかかわり合いながら」とは、「つながりを求め続ける姿」と捉えている。人、もの、こととの関わり、そして、つながっていくことで自分も相手もプラスになることを実感することで、つながりを求め続けて行動できるようになってほしい。そのために、「対話を通して考える姿」を目指す。対話することが目的ではなく、対話することで自分との考えの違いや共通点を見いだしたり、関連付けたりすることで、今のところ一番良いと考えられることを導き出していけるようになってほしい。それは、「子ども同士が協働する姿」「教職員や地域の人と対話する姿」「先哲の考えを手掛かりにする姿」を目指していくことで、達成されるのではないかと考えている。その中で、「批判的思考」を身に付けながら、場面に応じて「相互理解」や「合意形成」をしていく。その前提として「問題意識」をもって学習に取り組み、個の考えを明確にしていく必要がある。

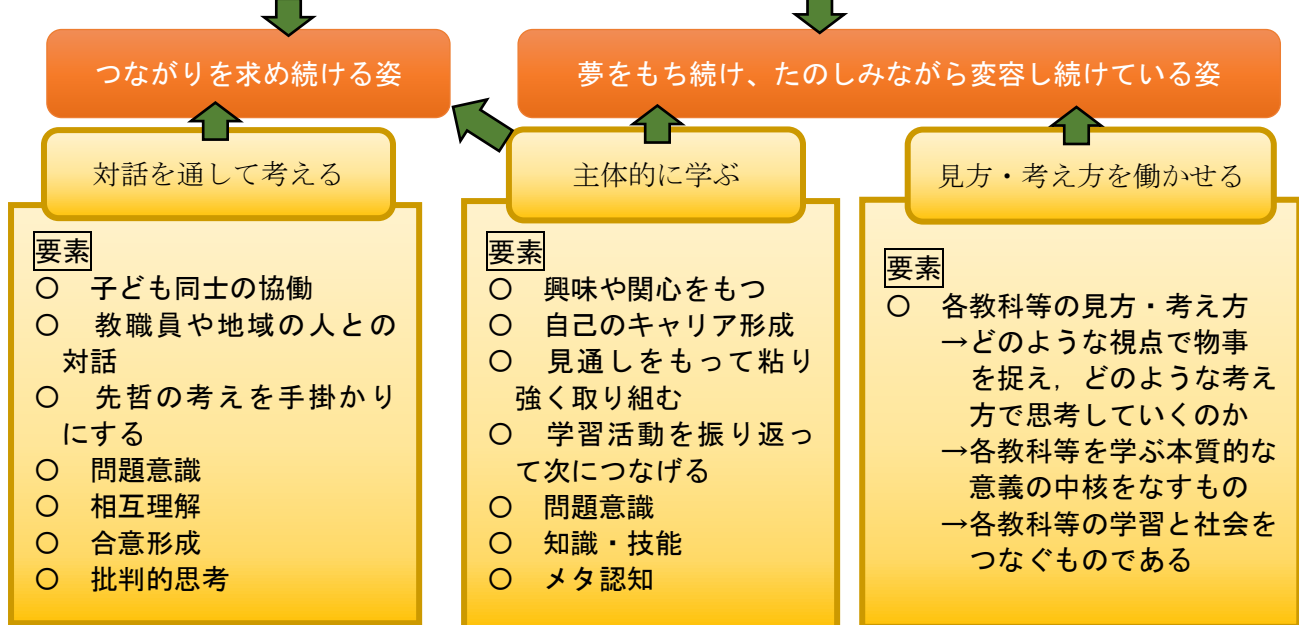
### (2) 「自分づくりを進める」について

「自分づくりを進める」とは、「夢をもち続け、たのしみながら変容し続けている姿」と捉えている。「夢」とは、将来就きたい職業だけでなく、なりたい自分像、ありたい社会像、日々の目標も含んでいる。変化の激しい時代に対応するためには、資質・能力を身に付け、自分を変容させる必要がある。それをたのしめるようになれば、自分を変容し続け、変化に対応することを越えて、自分から社会に働きかけてより良い方向に進めていくことができると考えている。そのために、「主体的に学ぶ姿」「見方・考え方を働かせる姿」を目指していくことで達成されるのではないかと考えている。

「主体的に学ぶ姿」については、「興味や関心をもつ姿」「自己のキャリアを形成していく姿」「見通しをもって粘り強く取り組む姿」「学習活動を振り返って次につなげる姿」を目指していく。そのためには、「知識・技能の確実な習得」、「メタ認知能力」が必要である。その前提として「問題意識」をもって学習に取り組めるようにしていく。「なぜ学ぶのか。」「どのように学ぶのか。」について子どもたちが自覚しながら学習を進めることで、意欲が持続したり、高まったりすることで活動に「熱中」して、「満足」する姿につながっていくと考えられる。

「見方・考え方を働かせる姿」については、学習指導要領総則編に、「各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の学習と社会をつなぐものであることから、児童生徒が学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすることにこそ、教師の専門性が発揮されることが求められる」と書かれている。「見方・考え方」を自在に操ることができるようになると、ある事象に出合ったときに、物事を多面的に捉えることができるようになる。そうすると、新しい発見ができる可能性が高まる。それは「熱中」する姿、より深い「満足」する姿につながる。そして自分づくりを進めることができ、人生を豊かにすることができると考えられる。

## ともにかかわり合いながら、自分づくりを進める子どもの育成



### 3 研究副主題の設定

#### (1) 副主題設定の背景

立野小学校の子どもたちの実態として、「知っていることが多いが、実際に試そうとしない」「世の中を眺めているだけのことが多い」「感動が少ない」「良い行動がたくさんあるが、自覚していない」「能力があっても自信がもてなくて一歩踏み出せない」というものが挙げられる。そのような子どもたちに対して、「汎用的な「高い質の知識」をつけてほしい」「世の中を「見る」ための「観察力」をつけてほしい」「感動を味わってほしい」「情熱をもって活動してほしい」「自覚的に行動できるようになってほしい」という願いがある。そのような姿を目指すためには、「生活科・理科」を中心に学習を進めていくことが有効なのではないかと考えた。

立野小学校で考える生活科を学ぶ意義は、「体験を通した学びが全ての教科の基盤になること」「不思議に思ったことに立ち止まることで問題解決のプロセスに気づき始めること」「情緒が豊かになること」「人・もの・ことと自分との関わりを太くできること」である。理科を学ぶ意義は、「自然事象の見え方が変わり、生活を豊かにできること」「問題解決の力がつくこと」「自然への畏敬の念を育めること」「科学の有用性と限界を知ること」と考えている。

湯川秀樹は、「一般の人々にとって必要なのは、専門的な科学知識をもつことよりも、むしろ科学の多くの部門に共通した根本的な物の考え方を身に付けることにあるとも考えられる。」と述べている。中谷宇吉郎は、「顕微鏡で形を知ったり、本を読んで分類の名前を覚えたりすることよりも、自分の眼で一片の雪の結晶を見つめ、自然の持っている美しさと調和に目を開くことの方がずっと科学的である。非科学の代表は、自分のすぐ目の前にある自然の巧みを見ないで、むやみと名前や理論だけを言葉で覚えることである。」と述べている。偉大な科学者たちが述べているように、自然事象をよく見ることで「自然の美しさ」を感じる心や、「共通する考え方」を大切にして、汎用的な力を育てていきたい。そこで、研究副主題を「自然をじっくり観察し、浸る子どもを育成する生活科・理科」と設定した。

## 研究副主題

### 自然をじっくり観察し、浸る子どもを育成する生活科・理科

## 研究仮説

自然をじっくり観察するための力を身に付け、自然や活動に浸ることができる子どもを育てるために「対話を通して考える」「主体的に学ぶ」「見方・考え方を働かせて学ぶ」授業をしていけば、つながりを求め続け、夢をもち続け、たのしみながら変容し続ける子どもになり、より良い社会を切り拓く子どもになるだろう。

## (2) 研究副主題の分析

### (ア)「自然をじっくり観察」について

「じっくり観察」の「じっくり」とは、「時間をかけて」「注意深く」という意味である。「自然」は学習する対象であり、生活科の場合は「人・もの・こと」に広げて考えていく。これまでの研究を通して、立野小学校では、「愛着をもって見る」「たのしんで見る」「目的をもって見る」「見方・考え方を働かせて見る」「細かいところを見落とさないで見る」「既習事項や自分の体験と関連付けて見る」「意図していなかったところも見る」「一見関係なさそうな物を結び付けて見る」という子どもの姿を「じっくり観察」していると捉えている。

理科では、「じっくり観察」しながら「問題解決」をしていく。生活科では、「じっくり観察」しながら対象と関わっていく。そうすることで、「自然」に高い関心をもって関わるができるようになる。そして、対象に浸ることができ、さらに詳しく観察することができる。そうすると意欲も高まり、「満足」することができると考えている。

菅井啓之先生（元京都光華女子大学教授）は、観察とは「直観」と「洞察」であり、「驚きの心」「不思議の心」「美しさの心」「気づきの心」をもって見る大切であると述べている。それは、「自然との対話」である。「観察」することで「浸り」、「浸る」ことで「観察」することができるようになる。「観察」は、「観て」「察する」のであり、ただ「見る」とは違う。「直観」と「洞察」が高まってきたときに「じっくり観察する姿」になるのではないかと考えている。

### (イ)「浸る」について

「浸る」とは、「どっぷりつかる」「境地に入る」「〇〇三昧」という意味である。立野小学校では、「浸る子ども」とは、「自分の生き方にプラスになっていることを自覚する」「今ある物の新しい良さ、美しさに気付く」「自分とみんなにとってよいものだと思ふ」という姿と考えている。

遊びに浸り、学びに浸る。学習対象と学習活動、その両方に浸る姿を目指す。自然事象や人・もの・ことへのことが大好きになり、対象に浸る姿。友達と話し合ったり、遊んだり、学びに浸る姿。それらが意欲の持続、高まりにつながり、「主体的に学ぶ姿」になっていくと考えている。

さらに、「浸る」ためにはその時間を楽しみに待っている状態「予韻（よいん）」になっていることも大切である。そして、学習に浸ることができればその後の「余韻」を感じることもできると考えられる。その「余韻」は次の学習の「予韻」になる可能性もある。「予韻」「浸る」「余韻」のつながりを考えて行くことによって「浸る」ことができるようにしていく。

## じっくり観察する姿

- 愛着をもって見る
- たのしんで見る
- 目的をもって見る
- 見方・考え方を働かせて見る
- 細かいところを見落とさないで見る
- 既習事項や自分の体験と関連付けて見る
- 一見関係なさそうな物を結び付けて見る

## 浸る姿

- 自分の生き方にプラスになっていることを自覚する
- 今ある物の新しい良さ、美しさに気付く
- 自分とみんなにとってよいものだと気付く
- わくわく（湧く沸く）しながら自ら動き出す

### (ウ)「自然をじっくり観察し、浸る子ども」について

自然を「じっくり観察」しながら問題解決することで、「自分にとっての価値」を見つけ、自然に「浸る」ことができる。自然に「浸る」ことができればそこにまた「価値」を見つけることができる。それが、「じっくり観察」することにつながる。その繰り返しにより、「価値」が広がり、その「プロセス（学び方など）」にも価値を見いだすことができるようになる。

そして、「浸る」ことで他の自然事象にも興味をもち、そこで出会ったものを「じっくり観察」することで、また「浸る」ことができるようになる。それがどんどん広がっていくことで「価値あるもの（こと）」が増え、「生きがい」になっていく。それは「自分づくり」につながっていくと考えている。

### (3) 研究主題を実現するための手立て

研究主題を実現するために、「主体的で対話的で深い学び」の視点での授業改善を進めている。そのため  
の具体的な手立てを6つ考えて実践している。これらの手立てのいくつかを組み合わせることで、浸る姿  
を目指し、資質・能力の育成をしていく。

#### (ア) 単元構成

生活科でも理科でも、「繰り返しの関わり」を大切に単元構成にしていく。動植物をすぐにお世話で  
きる場所に置いたり、何度も出かけていく時間を確保したりすることが考えられる。また、意欲を持続させ  
ながら、さらに高めていくために、図書資料を活用したり、観察日記をつけたりする。ただ繰り返すだけ  
なく、着目するところを明確にしたり、子どもの表現を価値付けたりすることで、意欲を持続させなが  
ら継続できるようにする。単元の中には今までの学習を振り返る場面を設定して、「浸る姿」につな  
がるようにしていく。

- ・問題が解決したら次の問題を見いだすことができるような問題が連続する構成
- ・単元の始めに学習内容の全て、もしくはいくつかの問題が見いだされ、一つずつ解決していく構成
- ・単元のスタートに出会った事象を最後にもう一度見直す構成
- ・単元の後半はグループごとに問題解決を進めていく構成
- ・単元の後半に身に付けた知識を活用する場面がある構成
- ・単元の途中で再導入をして問題を見いだす構成
- ・繰り返しのかわりによって問題を見だし、個や集団で解決していく構成
- ・個の試行錯誤を繰り返し、集団の力も借りながら追究していく構成
- ・科学的（実証性、再現性、客観性）に問題解決できるような場面を設定した単元構成
- ・偉人の業績や科学史を活用した構成

#### (イ) 振り返り

単元の途中や最後に振り返る時間を設定する。それが「浸る姿」につながる。そのときに、単元の最初に出  
会った自然事象にもう一度触れたり、使った教材を目の前に置いたり、実際の場所に行ったりすることで、状  
況に入り込み、振り返りの質を高められるようにする。

##### ○ 振り返りで書いたり話したりすること

- ・学習内容
- ・学習方法
- ・感想

##### ○ 振り返るタイミング

- ・1時間の途中
- ・1時間の終わり
- ・1問題解決の終わり
- ・考察などを書いた後→リライトする
- ・1単元終了後
- ・複数単元終了後
- ・1年間の終わり
- ・振り返りを読み返して振り返る

##### ○ 振り返りの仕方

- ・視点を示して書く
- ・自由に書く
- ・グループで話し合う
- ・全体で話し合う
- ・書いたものをもとに話し合う
- ・書いたものを見合っ  
てアドバイスし合う
- ・もう一度調べ直す
- ・ロイロノートで写真や動画を残して、振り返る場面で見返せるようにする
- ・学習履歴を掲示物として残し、常に振り返ることができるようにする

## (ウ) 具体的な価値付け

子どもの行動、文章、発言などを具体的に価値付けていく。「じっくり観察する姿」「浸る姿」が見られたとき、そこにつながる姿が見られたときに、何がどのように良く、何につながるのか、具体的に価値付けていく。これは、振り返りの視点となり、指導と評価の一体化とつながる。

- ・具体的に書いたり話したりできているか確認
  - できていれば賞賛し、できていなければどのように直すと良いかアドバイスする
  - 「いろいろ」「ちゃんと」「しっかり」は、具体的に話したり書き直したりするように伝える
- ・「好き」「楽しい」「嬉しい」「～したい」といった感情とつながっている発言や記述を取り上げて目立たせる
- ・学級、学年の目標としていることとつながる表現を取り上げて目立たせる
- ・何につながるかをはっきりさせてつなげられるようにする
- ・次どうするとよいのかアドバイスする
- ・共感する
- ・成長したことについて嬉しいといった感情を伝える

## (エ) ICT 活用

学習の効果を高めるために、主にコミュニケーションツールとして ICT 機器を活用している。

### ○ ロイロノート

- ・共有ノート→実験結果、観察した物といった情報の共有
  - グループワークの記録
  - グループワークの記録の共有

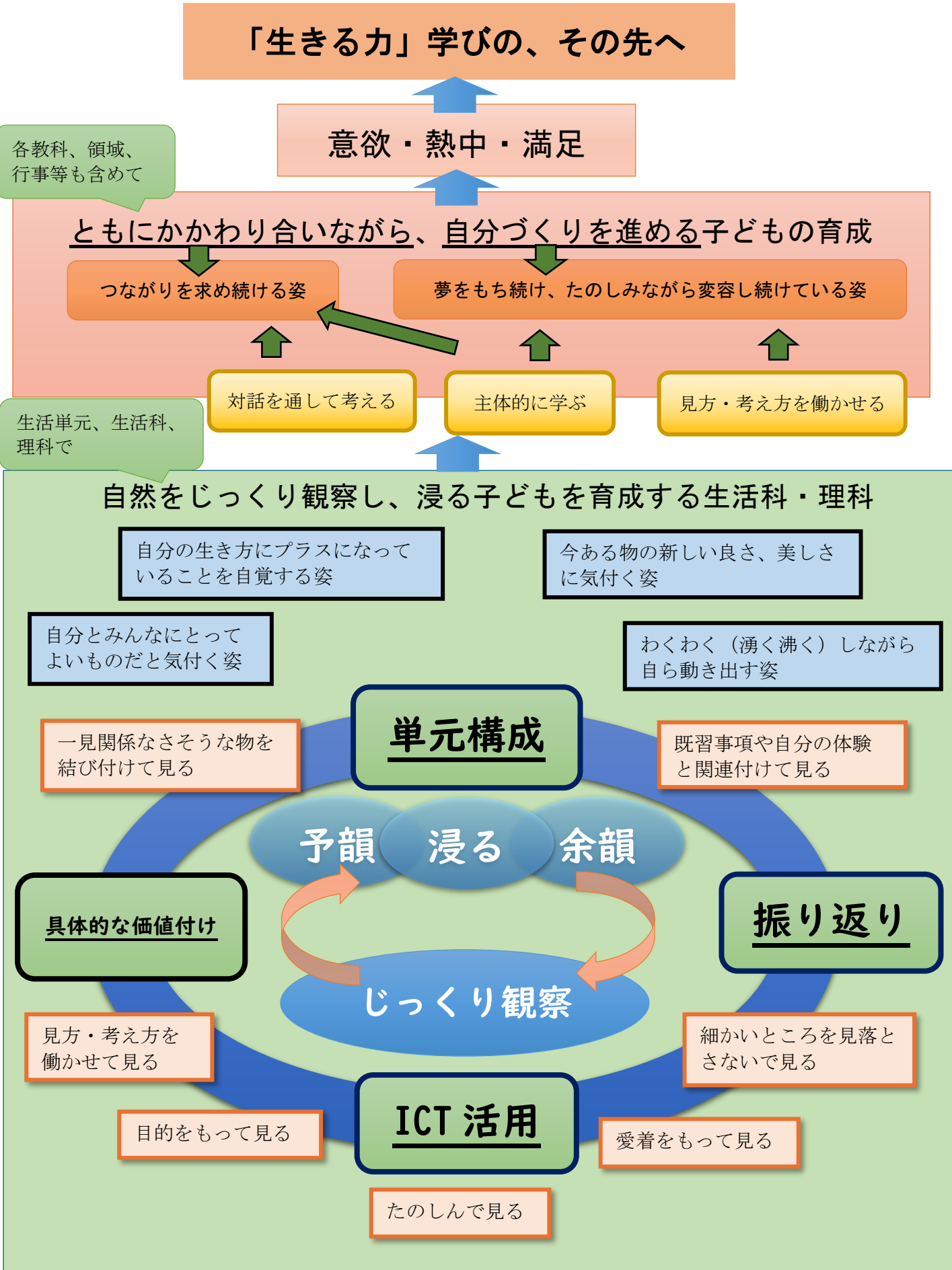
- ・提出箱→学習履歴（ノート）の蓄積
  - 提出箱を見返しながら振り返る
  - 観察記録の蓄積、共有

### ○ IOT 百葉箱

4, 5年生の理科では、IOT 百葉箱を活用している。立野小学校の気温の変化や雲の動き、他の場所のリアルタイムの天気の様子とその変化を調べることができる。

### ○ デジタル気体測定器とアプリ

6年生の理科では、デジタル気体測定器で計った気体の割合の数値について、選んだ数値の平均を出したり、計測前後の差を計算したりする作業をアプリで行っている。



#### (4) これまでの成果と課題と改善点

##### 成果

- 外部連携（主に地域の方々との関わり）する単元構成にすることで、学びに向かう力・人間性等が涵養された。
- 教科関連させた単元構成にすることで学びに向かう力・人間性等が涵養された。
- 振り返りを繰り返していくことで、記述内容が豊かになり、行動に移す子どもも出てきた。
- 考察の中で問題が見いだされると意欲が高まる。
- 考察の書き方を示し、丁寧に指導することで複数の実験結果から考えることができるようになった。
- ICTをコミュニケーションツールとして活用することで思考力・判断力・表現力が高まった。

##### 課題

- 実験結果が揃わないことがある。
- 実験結果が少しでも揃わないと考察できないと考えることをやめてしまうことがある。
- 子どもが自分の成長を自覚できるような声掛けができていなかった。
- 思いがあまり高まっていない子どももいる。
- 評価の基準を明確にしても指導に生かすことができないことがあった。

##### 改善案

###### 継続すること

- 「じっくり観察」と「浸る」を意識した単元構成
- 評価の基準の明確化
- 科学的（実証性、再現性、客観性）に問題解決をしていく授業展開
- 振り返りの充実
- ICT機器の活用

###### 研究すること

- 実験の技能を高めるために、実験の意味を理解できるように予想を確認して何のために実験するのか明確にする。そして実験方法を具体的に発想し、表をつくるなど、結果の見通しをもてるようにする。
- 結果が揃わなくても今の結果から何が言えるのか考えていく指導が必要。
- 「予韻」「浸る」「余韻」を意識した授業づくりをする。

###### →予想の充実

予想を話し合って問題を焦点化する

予想を話し合って解決方法を発想し、実験の意味を理解できるようにする

予想を話し合って実験結果の見通しをもつ

- 生活科の評価

###### 研修すること

- ノートへのコメントの充実
- その場でのコメントの充実
- 子どもの表現（ノートの記述、発言）の取り上げ方
- 思いを高めるための教材研究の仕方
- 振り返りのやり方（一時間、一単元、複数単元、学年末）